
子供と猫
坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供と猫

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

姪はいつも実家に帰ってくると猫と遊んでいる、そんな彼女を見て周りが思うことは。ユーチューブの漫画動画のオマージュ作品です。

第一章

子供と猫

木内辰雄は実家に一家で帰ってきた姉の子安沙都子短い黒髪で大きな目と奇麗なカーブを描いた眉に赤い程よい大ききで一六二位の背でスタイルのいい彼女に言った。辰雄自身は茶髪で細面で小さな鋭い目を持っている。背は一七三程で痩せている。

「真理香ちゃんも一緒だよな」

「当たり前でしょ、うちのひとね」

沙都子は弟に素っ気なく答えた。

「あの娘はね」

「そうだよな」

「うちの人は挨拶で」

自分の夫はというのだ。

「いつも来てるでしょ」

「姉ちゃんが実家に帰ったらな」

「あの律儀だから」

「公務員らしいな、そこは」

「そうでしょ、あんたも見習いなさいよ」

「俺も真面目で働いてるだろ」

弟は姉にこう返した。

「毎日な」

「高校出てからずっとね」

「工場でな、それで姉ちゃんも公務員でな」

「働きながらね」

「真理香ちゃん育ててるな」

「それで今日も連れてきたけれど」

姉は弟にあらためて話した。

「あの娘のところに行ったわ」

「チャのところにか」

「あの娘和室にいたから」

それでというのだ。

「そっちに行ったわ」

「そうなんだな」

「見て来る？」

弟にコーヒーを煎れながら話した、自分の分も煎れている。

「それなら」

「コーヒー飲んでからな」

「それじゃあね。お菓子あるから」

こう言ってカステラを出した、それでそこにきた眼鏡をかけて七分けにした一七〇位の背で痩せた大人しそうな外見の沙都子の夫智一と一緒にコーヒーとそちらを楽しみながら世間話に興じた。その後で。

和室に行くのだ、沙都子をそのまま五歳児にした様な外見の娘が雌の白猫と遊んでいた。猫じゃらしを出してだった。

猫の目の前で振る、そして猫が飛びつくのを見て笑っていた。

「ほらチャこっちだよ」

「ニャア」

「今日も遊んでるな、一緒に」

辰雄はそんな彼女達を見つつ微笑んで言った。

「真理香ちゃん本当に猫好きだな」

「あっ、お兄ちゃん」

少女は彼の声を受けて彼を見て言った。

「おじゃましてるね」

「うん、それでチャとなんだ」

「遊んでるの。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんとお兄ちゃんのお家に
来たら」

真理香は自分の母の実家をこう呼んでいるのだ。

第二章

「こうしてね」

「チャと遊ぶよな」

「だって猫大好きで一緒にいたら」

そうすればというのだ。

「それだけで幸せだし遊んだら」

「もっと幸せになるんだな」

「そうなの」

兄と呼ぶが叔父である彼に言った。

「だからいつも一緒に遊ぶの」

「そうなんだな」

「私猫大好き」

姪はこうも言った。

「だからこれからもね」

「一緒にいたいかな」

「ずっとね」

こんなことを言っていた。

真理香はチャと遊び続けた、辰雄は暫くそんな彼女達を見てから姉のところに戻って言った。

「真理香ちゃん本当に猫好きだな」

「ええ、だから今度保護猫引き取って」

姉はそれだと答えた。

「家族にするの」

「そうしてか」

「あの娘がいつもね」

「猫と一緒にいられる様にするか」

「そうするわ、私達も猫好きだし」

夫の方を見つつ話した。

「色々癒されるし」

「猫がいるとな」

「だからね」

それでというのだ。

「保護猫を引き取って」

「家族にするんだな」

「そうするわ」

「そうか、じゃあ真理香ちゃんずっとな」

「猫と一緒によ」

「そうしたらうちに来てもチャと遊ばなくなるか」

「どうかしらね」

姉は弟にくすりと笑って応えた、そしてだった。

沙都子は夫と共に家に保護猫を引き取った、すると一家特に真理香がその猫トムと名付けられた雄の黒猫を可愛がる様になったが。

「トム、今日はチャと一緒にだよ」

「ニャア」

「ナア」

実家にそのトムを連れてきてチャと会わせて二匹と一緒に遊ぶ様になった、辰雄はその光景を見て沙都子に言った。

「真理香ちゃん本物だな」

「本物の猫好きね」

「だからチャが好きでか」

「トムもよ、いつも可愛がってるから」

「チャだけでなくか」

「トムもよ。どの子も好きならいいでしょ」

「ああ、それならな」

辰雄は姉に笑顔で応えた、そうしてだった。

二匹と一緒に遊ぶ真理香を見て笑顔になった、目の前の姪はどちらの子も公平に可愛がって一緒に遊んでとても幸せそうであった。

子供と猫 完

2
0
2
3
・
1
1
・
2
0

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~29002

子供と猫

2023年11月20日 21時56分発行